

佐野 洋



第4の關係

POPULAR BOOKS



昭和40年2月25日 発行

第4の關係

著 者 佐 野 洋

発行者 矢 貴 東 司

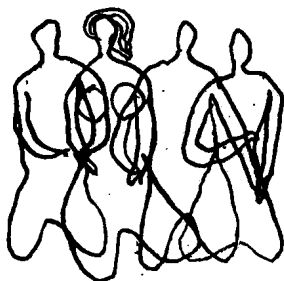
印刷者 小 泉 輝 章

¥ 270.
《検印省略》

発行所 株式会社 桃 源 社

東京都中央区日本橋蛸殻町1-12
電話 (671) 4001~2 番
振 替 東 京 64351 番

第4の關係



佐野洋

目次

第 1 部 背 景……………	七
第 2 部 事 件……………	七
第 3 部 摸 索……………	二七
第 4 部 動 機……………	二七

登場人物紹介

八木利介

真和女子大心理学教授、評論家。

八木美樹子

利介の妻、婦人評論家。

山上千津子

薬科大助手、美樹子の従妹。

田辺源三

保育短大講師、祥江と同アパート

広尾祥江

バー・クアトリエーム女給、田辺
と同アパート。

先崎俊子

クアトリエーム女給みどりの本名
以前早坂法律事務所に勤務。

早坂保夫

弁護士、八木と高等学校が同窓。

薄淵精一

雑誌『発見』編集長。

塩沢夏夫

『発見』記者兼カメラマン。

川名善行

ユニヴァーサル世論研究所長。

本堂

池上署警部補。

岩崎

刑事。

馬橋

地検検事。

第4 の 関 係

装幀 長尾みのる

第 1 部 背 景

何がうるさいと言って、ミステリーを読んでいるそばで、つべこべ言われるくらいうるさいことはありません。だから、あなたも、各部の扉で、作者が妙なことを言うのを、うるさいと思うかも知れませんが、もしお嫌いなら、読みとばしてしまっても、結構です。それを怨んで、あなたを殺そうとは思いません。

第 1 章

(九月二日 水曜日 午後一時——三時)

1

三十秒前。八木美樹子^{やぎ みきこ}はハンカチーフを出して、鼻の頭をそっと押えた。テレビのこの番組を担当して、この日はすでに五回目だったが、始まる寸前になると、鼻がかゆくなる癖はまだ直っていない。

ディレクターが合図した。

それまで、何かを考えていたように難しい表情をしていた女アナウンサーが、急に微笑を浮かべて、コマーシャルを喋り^{しゃべ}始めた。美樹子は、それを横で見ながら、職業的笑顔をこれほど見事に作り出せる女アナウンサーに感心していた。

コマーシャルが終った。

「それでは」と、女アナウンサーは、引き続いて美樹子の紹介に移った。「早速、『テレビ相談室』を始めたいと思います。今日は水曜日ですので、愛情問題。担当は婦人評論家の八木美樹子

先生でございます」

ディレクターのキューが、美樹子に向って投げられた。先刻から美樹子の正面に据えられていたテレビカメラの、赤いランプがついた。

美樹子は、表情を和らげるように氣を使いながら、カメラに向って頭を下げた。

「それから、今日八木先生にご相談なさいますのは、東京の池袋にお住いのご婦人でございます」

そのアナウンサーの説明につれて、『患者』がはいって来た。出演者の例として、仮装舞踏会に使うような黒い紙製マスクをつけているので、正確な人相や年齢は分らなかったが、二十五、六だと思われた。髪は染めているというほどではないが、脱色ぐらいはしているらしい。幾分赤味を帯びていた。『また男にだまされたという問題らしいな』と美樹子は思った。

「あのお先生」と女アナウンサーが、『患者』の環境について、説明を始めた。「この方は、ご主人が工場にお勤めになっておりますが、ご自分でも、夜はバーにおつとめだそうでございます。二年前に恋愛結婚なさいました。ご主人のお年は三十一歳、五つ違いだそうです。お二人とも初婚です」

こう言つて、女アナウンサーは、美樹子の前に、これらのことを書きこんだ『カルテ』を渡した。

美樹子は軽くなずきながら、聞いていた。首を心持ち左に傾け、視線は相手から、わざと逸^そらしていた。それは、この番組を担当してから、美樹子が身につけた一種の技術であつた。

第一回目るとき、美樹子はなるたけ相手の眼に視線を注ぐようにしていた。自分が真剣に聞いていることを強調するには、その方がよいと思ったからだ。ところが、それは失敗であつたらしい。相手は眼のやり場に困るらしく、妙に落着きがなかった。言葉もとだえ勝ちであつた。

その第一回目が終わったとき、ディレクターが美樹子に注意した。

「やっぱり、面と向つてじつと見られると、思ったことが、なかなか言えないんじゃないでしょうかねえ。相手の胸のあたりを見るようにして、時々顔に目をやる。そうした方がスムーズに行くかも知れませんよ」

「でもねえ。その方が嘘言^{かた}つてるかどうか、眼を見ないと分らないでしょう？」

「いや、嘘は言わないと思いますよ。本人は何か悩みがあつて相談を受けに来たんですから、嘘を言つたら、自分の損になりますよ」

「でもねえ、出演者の中には、タレント気取りの人や、出演料目当の人もいるんじゃないかしら。そんな人は、相談すること自体に、目的はないんだから、勝手なことを言い出すのじゃありません？」

それは、この番組に出演交渉を受けたときから、美樹子が抱いていた疑問であつた。

——雑誌、新聞など活字の上の『人生相談』と違って、テレビでは、完全に身許を隠すわけにはいかない。いくら仮装用のマスクをかけたところで、関係者が見れば分るだろう。だから出演希望者はそれほどあるまいと美樹子は思つて、その点をたしかめてみたのだが、交渉に来たプロ

デューサーは、その心配はないと言った。

「そう思うでしょう？　実は、ぼくらもそんなに希望者があるとは思わなかったんですよ。ところが、第一回の希望者は四十人以上あったんです。二回以後はもっと増えると思いますよ」

「へえ、呆れた。本当にマスコミ時代ね、個人的悩みが、商品価値を持って来たわけかしら……」
「そう言いながら、美樹子は疑問を持ったのである。『悩みが商品価値を持つようになると、商品化された悩みを、わざわざ作り出すものが、でてくるのではないかしら』

その時は、美樹子は言わなかったのだが、出演者がショーに出たようなつもりで、ふざけた質問をするのではないかという考えは、その後もずっと持ち続けていた――。

「しかし、それは割切っていた方がいいのではないでしょうか？」とディレクターは言った。
「つまり、テレビに出る以上、その席で喋られた悩みというものは、喋られたとたんに、社会化されて、個人的な悩みではなくなってしまう。つまり、それが出演者の本当の悩みであるかどうかは、問題でなくなるわけです。ですから、先生は目の前にいる質問者にあまりとらわれず、質問の内容自体にお答え下さればいいと思います」

「そんなもんかしら？」

「だって先生、先生が週刊誌でおやりになっている『人生相談』にしても、質問が真実の悩みであるかどうか、質問者が嘘をついているのではないかという点について、何も保証もないんですよ。それと同じように考えて下されば……」

「そういう考え方もできるのかも知れない」美樹子はそう考えて、二回目からは、質問者が本当

のことを話しているかどうかを、あまり問題にしなくなった。

——美樹子がこのような『人生相談』に首をつっこむようになってから、まだ十ヵ月と経っていない。

最初はある週刊誌だった。その記者は、もともと、彼女の夫、八木利介やぎりすけに姦通問題の意見を聞きに来たのである。八木は真和女子大で、社会心理学を講じていたが、同時に社会評論家としてジャーナリズムで名をなしていた。

記者と八木とが話しているところへ、美樹子がお茶を運んで行くと、その記者は、

「ところで、奥さんはどうお考えです？」と尋ねた。美樹子は興味を持って、大体の説明を聞いてから、自分なりの意見を話した。するとその記者は喜んで言った。

「なるほど。奥さんの意見は面白いですよ。すごく独創的だ。それも使わせていただきたいですな」

その言葉通り、週刊誌には美樹子の意見が麗々しく活字になった。そればかりでなく、その週刊誌から、新設の『人生相談』欄のレギュラー解答者になってくれという依頼が来て、ついに引受けさせられたのだった。そして、何時の間にか、美樹子には婦人評論家の肩書がつけられてしまい、東京テレビつまりTTVの『テレビ相談室』をも担当することになった。

『テレビ相談室』は、毎日午後の料理の時間に続いて放送された。法律、教育、育児、保健、家庭、経済、愛情などに分れていて、水曜日が、美樹子担当の愛情問題であった。美樹子の評判は比較的よいしかった。それは美樹子が三十三という若さであり、しかも学生時代から、男に騒

がれたほどの美貌だったので、女史臭を感じさせないためかも知れなかった。

また解答にしても、かなり思い切ったことを言っていた。教えさとす型ではなく、一緒に考える型の解答であった。

「そうねえ、ちょっと困るわね」と首をかしげ「でも、あたくしだったら……」と解答をする。彼女が若いだけに、こうした演技は効果があつたらしい。

2

バーにつとめているという『患者』は、軽く頭を下げてから話し出した。

「先生、あたくし、夫と別れようかと思っていますの？」

「まあ！　なぜですの？」

いきなりこんな切り出し方をする『患者』には、いままでぶつかってなかった。美樹子も興味を持った。

「先生は、夫婦にとって一番大切なものは何だとお思いですか？」

「それは愛情ですわ」

「いいえ、そんな抽象的でなく、そのものずばりおっしゃって下さい」

美樹子はあわてた。この『患者』の求めているのが、『セックス』という答えであることは分かったが、これがテレビで放送されていることを考えると、そうは答えられない。

美樹子はディレクターの方を盗み見た。もともと、出演者の質問内容は、係員が検討して、あまり露骨にならないよう注意してあるはずだったのだ。

ディレクターも、困惑であった。しかし、すでに放送は始まっている。今さらどうにもならない。美樹子の視線を受けて、彼は右手で拝むようなしぐさをした。それは、『おまかせするから、うまく切抜けてくれ』というサインらしかった。

美樹子は覚悟を決めた。

「でも、ご質問の方が、抽象的なんですもの。議論するところではないんですから、あなたのお悩みを、率直にお聞きたいわ」

「はあ、すみませんでした」患者は意外におとなしく折れた。

しかし、美樹子が安心する間もなく、彼女はさらに美樹子を困らせるようなことを言った。

「あたくし、夫に不満なんです」

「とおっしゃると、ご主人の愛情がさめたとか？ 愛情を疑ってらっしゃるとか？」

「いいえ、普通の意味の愛情はあるんじゃないかと思えます。アパート住いんですが、お隣の奥さんなんか、うちの主人が優しいと言って、羨しがってらっしゃいますから……」

「まあ」と美樹子は笑った。「ごちそうさま」

「でも先生。本当の愛情というのは、優しくするとか、浮気をしないとただけではないと思いませんか。妻に不満を与えていたんでは、やはりだめですわ。そうでしょ？」

「さあ？ あたくしよく分らないけれど……」